

臨床心理士及び公認心理師養成における学内実習のあり方に関する検討 —修了生を対象としたアンケート調査の質的分析—

福岡大学臨床心理センター
インターク・ワーカー
芦谷 湖乙音

要約

臨床心理士及び公認心理師養成において、学内実習は欠かすことのできない要件となっている。現場で働く臨床心理士及び公認心理師が、この学内実習について、①どの程度で有益と考え、②どのような実習をさせてほしいのか、③体験しておけばよかったことは何かを把握することは、今後の学内実習のあり方を考える上での基礎資料となり得る。そこで本研究では、修了生を対象にアンケート調査を実施し、得られた自由記述の回答についてSCATによる質的分析を行った。その結果、これまでの学内実習の有益性としては、《クライアントと会うための心理的・物理的準備》や《有資格者との間でのセラピューティックな体験》等を通して『心理師(士)としての基本姿勢の学び』が得られることが示された。また、学内実習でさせてほしいかったこと、しておけばよかったことは何かに関する回答から、今後の学内実習のあり方が考察された。

キーワード：学内実習、公認心理師、臨床心理士、SCAT

I 問題と目的

2019年に公認心理師第1号が誕生した。2020年には、大学院で正規のカリキュラムを受けたいいわゆるEルート該当者が誕生し、2022年には、学部の4年間も正規のカリキュラムを受けたいいわゆるAルート該当者が大学院に入学、2024年には、Aルート該当者が修了年度内に初受験をすることとなる予定である(厚生労働省, 2022)。

大学院における公認心理師養成のカリキュラムにおいては、「心理実践実習」として450時間以上、そのうち、担当ケースに関する実習は270時間以上するように定められている(厚生労働省, 2017)。松井(2021)は「長年の実績と体系的な養成システムが確立されている臨床心理士の養成指定大学院が、実際にはこの度の公認心理師養成を担っている」と述べており、公認心理師養成においても学内実習のあり方は重要である。

これまでの臨床心理士養成の実習は、「学内の附属心理相談室での実習がその中心」(松井, 2021)であり、「個人療法優位の志向性」につながりやすい傾向があったとの指摘がある(奥村, 2019)。それと比較して、公認心理師養成の実習は、学内実習とともに学外実習を展開し、「どのように専門性を発揮し、多職種と連携しながら役割を果たしていくか」(松井, 2021)に重きが置かれている。これについて奥村(2019)は、養成課程においては、「個別の心

理療法の視点」と「組織で働く場合のもっと複雑な関係性における身のこなし」の両者のバランスが重要である、と述べている。また、老松(2019)は公認心理師養成において、学外実習で手薄になりやすい部分を補うための学内実習の重要性、具体的には二者関係に反映される自分自身のあり方を手厚いスーパーヴィジョンのなかで見つめうる機会の貴重さについて指摘している。これらの指摘を踏まえ、今まで培われてきた臨床心理士養成における学内実習を土台にしながらも、公認心理師養成における学内実習のあり方を検討することは重要になる。

以上のことから、在学時に公認心理師法が施行された学年(以下、D2ルート該当者)、及び、正規の公認心理師養成カリキュラムに則って修了した学年(以下、Eルート該当者)が、修了後、実際に現場で働いてみて、学内実習をどの程度で有益だったと感じているか、また、どういう実習体験をしておけばよかったと思うか、現状を把握することは、Aルート該当者の学内実習の今後のあり方を検討するための基礎資料となり得ると考えられる。

心理臨床家養成のあり方の視座を得るために、修了生を対象にアンケート調査やインタビュー調査を実施した研究は、これまでも複数のものがある(高橋, 2008; 永野, 2007; 海老名, 2008; 金沢, 2014)。これらではいずれも、学内実習の有益性と要望等について調査していた。これらの先行研究で

は、臨床心理士養成についての視座を得るための調査であり、公認心理師養成としての視座を得ることを目的とした調査ではない。

そこで本研究では、D2ルート該当の修了生及びEルート該当の修了生を対象に、在学時の学内実習が現在の公認心理師としての心理臨床活動にどの程度で役立っているかについて調査することで、公認心理師養成における今後の学内実習のより良いあり方について予備的に検討することを目的とする。

II 方法

1. 対象

D2ルート該当及びEルート該当のA大学大学院博士課程前期修了生のうち、A大学臨床心理センターのOB・OGメーリングリストにメールアドレスの登録があった35名を対象とした。そのうち、15名から回答を得た。回収率は42.9%であった。

2. 調査期間

調査期間は、2022年3月1日から2022年3月31日までであった。

3. 調査方法

ウェブフォームによるアンケート調査を実施した。なお、本調査の主旨についてはアンケートの冒頭に記載した。調査協力に同意が得られる場合は、回答欄に「同意する」のチェック欄を設け、同意が得られる場合のみ、これにチェックを付すよう依頼した。そして、アンケートに回答をするよう依頼した。そのため、本調査の分析に使用するデータはすべて、被調査者の同意を得たものとする。

4. 調査内容

高橋(2008)及び永野(2007)の質問項目を参考に、以下の質問項目を設定した。

フェイスシートとして、1)大学院博士課程前期修了年度、2)公認心理師資格の有無、3)臨床心理士資格の有無、4)現在の心理臨床活動領域(複数回答可)について尋ねた。また、5)在学時の学内実習が現在の心理臨床活動にどれくらい役立っているか、全く役立っていない(1点)～非常に役立っている(5点)の5件法で尋ねた。具体的な実習内容としては、①電話受付実習、②インターク面接の陪席、③インターク面接の担当、④インタークシートの作成、⑤見立て(インタークシート)の作成、⑥ケースの事前事後ミーティング、⑦カンファレンスへの出席、⑧カンファレンスでの報告、⑨ケースカ

ンファレンス、⑩事例検討用資料作成、⑪継続ケースの担当、⑫知能検査の実施、⑬知能検査の所見作成、⑭知能検査結果のフィードバック面接、⑮臨床心理センター附設学校適応支援教室「ゆとりあ」*¹での実習、⑯個別スーパービジョン、⑰臨床心理センター業務等マニュアル、⑱各係の仕事、⑲臨床心理センター事務室での雑談、⑳出会い(同期、先輩、後輩、教員等)、を設問した。

その他、学内実習において、6)在学時に体験・身につけておいて良かったと思うこと、7)在学時に体験させてほしかったこと、8)在学時にやっておけばよかったと思うことについて、自由記述で尋ねた。

*1 学校適応支援教室「ゆとりあ」とは、心理的・発達の要因のため不登校状態にある児童生徒への心理教育的支援を行い、学校復帰や社会性の発達を目指す通級型施設である。

5. 分析方法

質問1)～4)のフェイスシートに関する項目についてはまとめ、5)の質問項目の点数については集計した。

6)～8)の自由記述での回答については、Steps for Coding and Theorization(以下、SCAT)(大谷, 2008; 大谷, 2019)による質的分析を行った。SCATとは、<1>データの中の注目すべき語句、<2>それを言いかえるためのテキスト外の語句、<3>それを説明するようなテキスト外の概念、<4>そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる分析手法である(大谷, 2008; 大谷, 2019)。

ある回答者の自由記述の回答においては、他の回答者の回答と同様の概念が形成されることがあり得る。そこで本稿では、福士・名郷(2011)の手法を参考に、ある回答者の自由記述の回答において、他の回答者の回答と同様の概念が形成された場合は、同じ概念としてそれらのテキストを位置づけ、テキストを羅列する形式で記載した。

III 結果

1. 調査協力者の属性

D2ルート該当者が4名、Eルート該当者が11名、合計15名であった。15名のうち、公認心理師有資格者が15名(100%)、臨床心理士有資格者が12名(80.0%)であった。現在の心理臨床活動領域につ

いては、医療保健領域7名(36.8%)、産業労働領域0名(0%)、教育領域4名(21.1%)、福祉領域7名(36.8%)、司法矯正領域1名(5.3%)であった。心理臨床活動領域ついて、非常勤含む延人数は19名であった。

2. 学内実習の有用性についての項目別評価

質問5) 在学時の学内実習が現在の心理臨床活動にどれくらい役立っているかについての項目別の結果を図1に示した。「全く役に立っていない」と回答された項目は一つもなかった。「あまり役に立っていない」に回答された項目は①電話受付実習(1)、③インテーク面接の担当(1)、⑯個別スーパーヴィジョン(1)、⑰臨床心理センター等業務マニュアル(2)、⑱各係の仕事(2)であった。なお、()内の数字は回答数である。反対に、「やや役立っている」「非常に役立っている」にのみ回答された項目は②インテーク面接の陪席(11)、⑤見立ての作成(10)、⑦カンファレンスへの出席(12)、⑧カンファレンスでの報告(12)、⑫知能検査の実施(14)、⑬知能検査の所見作成(14)であった。()内の数字は「非常に役立っている」の回答数である。

3. 学内実習の有益性

質問6) は「在学時の学内実習に関する上記の項

目以外で、現在の心理臨床活動に役立っていることはありますか?」であった。質問6) に対して得られた自由記述の回答のうち「特になし」(2)と質問5)の項目に重複する「カンファレンス」(1)、学内実習とは直接関係のない「外部実習」(1)と回答された4つを除外した。()内の数字は回答数である。なお、一人の回答者が、複数の概念について回答していると判断されたものについては、文脈を損ねない範囲でテキストを切片化(以下、セグメント化)した。例えば、「面談時の服装などは卒業後も気を付けるようにしている。クライアントの要望に振り回されない姿勢(遅刻、時間より早い面談、日時変更など)を学べたのは良かった。」という記述については、「面談時の服装などは卒業後も気を付けるようにしている。」「クライアントの要望に振り回されない姿勢(遅刻、時間より早い面談、日時変更など)を学べたのは良かった。」の2つにセグメント化した。

その結果、17のテキストが得られ、21の「テーマ・構成概念」が形成された。形成された21の「テーマ・構成概念」を紡いで、ストーリー・ラインを記述した(表1)。なお、表1に記載のテキストは、固有名詞等で個人が特定される可能性のある文言等を除外し、抜粋して記載したものである(表3,5同様)。また、ストーリー・ライン中の下線部は「テーマ・構成概念」を指す(表3,5同様)。

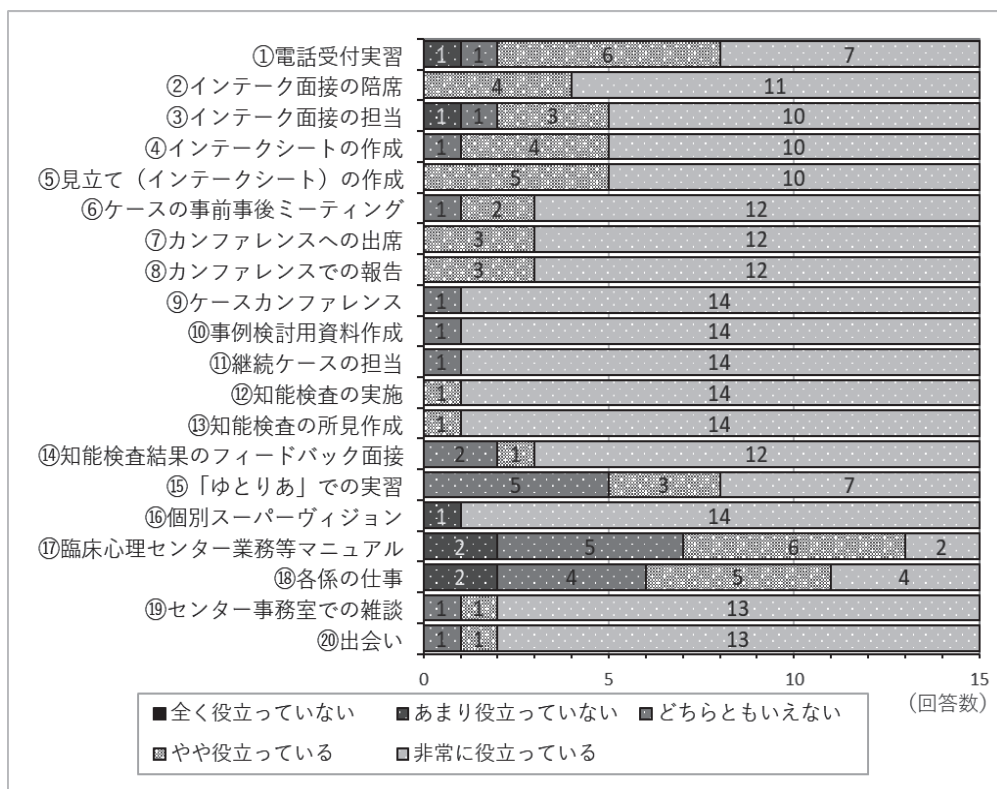


図1 学内実習の有用性についての項目

表1 学内実習の有用性

番号	テキスト	<1>テキスト中の 注目すべき語句	<2>テキスト中の 語句の言い換え	<3>左を説明するよう テキスト外 の概念	<4>テーマ・構成概念
1	面接室をあらかじめ過ごしやすく調整する(清潔・温度・音楽などを)ことが、センターに居るときは当たり前でしたが、臨床にでると自身が気を付けなくて周りがしてくれるわけでもないで、面接に臨む前準備のなところを考えられるようになったことは役に立っていると思います。	面接室, すごしやすく調整, 当たり前, 自身が気を付けなくて, 面接に臨む前準備のなところを考えられるようになった	心理面接の事前準備, セラピストの心構え, クライアントへの配慮	心理士としての基本姿勢 クライアントとの 出会い方の学び	クライアントと会うための 心理的・物理的準備, 成員が居心地よく感じる 環境整備
2	言葉遣いやマナーは知っておくと良かったと思います。特に言葉遣いは、面接でも癖で出てしまうところだと感じています。必ず正しい言葉遣いで話す、というところまで厳しく取り締まる必要はないですが、相手に誤解を与えないような言葉遣いを意識する必要があると思います。	言葉遣いやマナー, 面接でも癖で出てしまう, 相手に誤解を与えないような言葉遣いを意識	礼節, 相手に配慮した言葉遣い	社会人としてのマナー	一社会人としての礼節
3	面談時の服装などは卒業後も気を付けるようにしている。	面接時の服装	心理面接時の整容	TPOにあわせた整容 服装が相手に与える印象 服装の意味	クライアントの目にどう映るか 意識した整容
4	面接には枠があり、その枠の中でできることを行うという学び	面接, 枠, 枠の中でできることを行う	心理面接における 枠の大切さ, 枠の遵守	心理面接における 「枠」の意味に関する 体験的学び	心理臨床における 「枠」の重要性 に関する体験的気づき
5	クライアントの要望に振り回されない姿勢(遅刻、時間より早い面談、日時変更など)を学べたのは良かった。	クライアントの要望に 振り回されない姿勢	クライアントの要望に落ち 着いて対応する姿勢	心理臨床における 「枠」の重要性 心理士としての 毅然とした振る舞い	
6	先生方やインターワーカーさんからの院生ひとりひとりに合わせた助言・心遣いはその時の自分にとって有益なだけでなく、自分が「支援」する立場になったときの心構えになりました。	先生方, インターワーカー, ひとりひとりに合わせた 助言・心遣い, 自分が「支援」する立場 になった時の心構え	有資格者からの 助言・配慮, 支援者としての心構え	有資格者の セラピューティックな関わり, 有資格者との間での クライアントの擬似体験, ロールモデルとしての 有資格者の存在	個別にあわせた 有資格者からの助言, 有資格者との間での セラピューティックな体験, ロールモデルとしての 有資格者の存在
7	言葉の言い回しや使い方(クライアントを傷つけない)に留意すること	言葉の言い回しや使い方, クライアントを傷つけない, 留意	クライアントに配慮した 言葉遣い	受け手の気持ちに配慮した 言葉遣い 相手に伝わる言葉遣い	言葉の繊細さへの気づき
8	否定されない関係の中で「心理士(師)としてのふるまい方も心に残っています。	否定されない関係, 「心理士(師)としての ふるまい方	「心理士(師)」としての 肯定的な関わり	肯定的に受けとめられる体験 ロールモデルとしての 有資格者の存在	否定されない関係性の心地よさ を作ることが「心理士(士)」 としての居方の一つ であることの発見
9	検査結果フィードバックの時にインターワーカーに入ってもらい、その面接を一緒に振り返ってもらった体験	検査結果フィードバック, インターワーカー, 面接と一緒に振り返って もらった体験	面接に関する有資格者か らのフィードバック, インターワーカーからの 肯定的フィードバック	心理臨床活動・実習に関する 有資格者からのフィードバック, 心理臨床の学びを深める きっかけとしての 有資格者とのやりとり	心理面接実施への 有資格者の同席, 心理面接に同席した有資格者 からのフィードバック
10	教育分析, 自分のキャパシティを知ること	教育分析 自分のキャパシティを知る	スーパービジョン 自分の限界を知る	自分の限界を 知るためのSV	心理臨床家としての 間主観的なキャパシティの体感
11	同期と学びの場を開催しており、そこでは主に心理検査について触れて体験的に学ぶ機会になりました。	同期と学びの場, 心理検査, 体験的に学ぶ	同期との自発学習	受動的な座学に留まらない 主体的な心理検査の学習	各種心理検査に関する 能動的学習
12	いろんな心理検査がすぐ見れるところに置いてあることで興味もてました。	いろんな心理検査, すぐ見れるところに置いてある	心理検査への 触れやすさ, 体験的学習	各種心理検査を閲覧しやすい 学習環境の活用	各種心理検査へのアクセスが 容易な学習環境
13	講義や実習での、多職種との関わりやロールプレイ 外部との書類のやりとり(御礼状、情報提供の書類など)	書類のやりとり	文書作成	情報提供の際の 作成書類の要点, 書類作成時のマナーの 基礎理解	連携の一端としての書類作成, 情報提供書等の文書作成 にともなうビジネスマナーの習得
14	同期とは色々なことを話して分担したり、協力して過ごすことの多かった2年間ですが、心理職として働く中で他職種との連携・共働にも通じるころがあると感じます。	同期, 話し合って分担, 協力して過ごす, 心理職として, 他職種との連携・協働にも通じる	同期との連携, 他職種連携の基礎	他職種連携における 基本姿勢の学び, 同期と繋がることから始まる 連携の基礎づくり	同期と繋がることから見つけた 連携の基礎
15	連携の基礎を学んだように考える。その人に合わせてコミュニケーションの取り方を変える必要があった。分からないことや困ったことは些細なことでも積極的に相談したり、何気ない会話を大切にできた。	連携の基礎, その人に合わせて コミュニケーションの 取り方を変える, 些細なことでも積極的に相談, 何気ない会話を大切に	連携の土台づくり, 相手に合わせたコミュニ ケーションスタイル, 報告・連絡・相談	他職種連携における 基本姿勢の学び	円滑な連携のための フラットな日常会話
16	現在は、挨拶や雑談など日々のコミュニケーションを大事にしなが、連携が回りやすい関係づくりを行っている。そういった雰囲気づくりは大学院の際の経験が活かされていると考える。	挨拶や雑談, 連携が回りやすい関係づくり, 雰囲気づくり	雑談の大切さ, 関係構築のための 雰囲気作り	連携しやすくするための 環境整備, 人と繋がるための環境づくり	他職種と繋がるための 環境づくりの重要性への気づき
17	電話受付の際の言い回し、様々な意見をもつ人(同期・先輩など)との話し合い、ケースや同期との関係を通して自己理解を深めること	関係を通して, 自己理解を深めること	セルフモニタリング	自分の対人交流パターン への気づき	自分らしさへの気づき

ストーリー・ライン

実習の手始めにクライアントと会うための心理的・物理的準備として一社会人としての礼節や成員が居心地よく感じる環境整備、クライアントの目にどう映るか意識した整容について学び、言葉の繊細さへの気づきや心理臨床における「枠」の重要性に関する体験的気づきを得ていた。知能検査を実務として担当し始める頃には、各種心理検査へのアクセスが容易な学習環境を活用して、各種心理検査に関する能動的学習を行っていた。継続面接の担当をする頃になると、情報提供書等の文書作成にともなうビジネスマナーの習得や連携の一端としての書類作成であることへの気づきが体験されていた。

有資格者との間では、心理面接実施への有資格者の同席後の心理面接に同席した有資格者からのフィードバックや個別にあわせた有資格者からの助言が有資格者との間でのセラピューティックな体験を生んでいた。こうしたロールモデルとしての有資格者の存在が、否定されない関係性の心地よさを作ることが「心理士(士)」としての居方の一つであることへの発見を促し、心理士(士)としての間主観的なキャパシティの体感や自分らしさへの気づきを促した。同期の間では、同期と繋がることから見つけた連携の基礎が、円滑な連携のためのフラットな日常会話や他職種と繋がるための環境づくりの重要性への気づきを生じさせた。

表1で得られたストーリー・ラインから、現在の臨床活動に有益となっている学内実習に通底するものとして『心理師（士）としての基本姿勢の学び』があると捉え、【時間の経過に伴う実務を通じた有益な学び】と【スタッフとの関係性の中での有益な学び】の2つのカテゴリに分類した。そして、前者のカテゴリを5つの下位カテゴリに、後者のカテゴリ

を3つの下位カテゴリに分類した(表2)。以下、カテゴリを【】、下位カテゴリを《 》、下位カテゴリに含まれる概念をく>に括り、記載した。

この表1, 2を手がかりに、大学院入学から修了までの学内実習の流れを踏まえて、現在の臨床活動に有益となっている学内実習での体験を図2に示した。

表2 『心理師（士）としての基本姿勢の学び』として生成したカテゴリ

【時間の経過に伴う実務を通じた有益な学び】	
《クライアントと会うための心理的・物理的準備》	<一社会人としての礼節> <成員が居心地よく感じる環境整備> <クライアントの目にどう映るか意識した整容> <言葉の繊細さへの気づき> <心理臨床における「枠」の重要性に関する体験的気づき>
《各種心理検査へのアクセスが容易な学習環境》	
《各種心理検査に関する能動的学習》	
《情報提供書等の文書作成にともなうビジネスマナーの習得》	
《連携の一旦としての書類作成》	
【スタッフとの関係性の中での有益な学び】	
《有資格者との間でのセラピューティックな体験》	<心理面接実施への有資格者の同席> <心理面接に同席した有資格者からのフィードバック> <個別にあわせた有資格者からの助言>
《ロールモデルとしての有資格者の存在》	<否定されない関係性の心地よさを作ることが「心理師（士）」としての居方の一つであることの発見> <心理師（士）としての間主観的なキャパシティの体感> <自分らしさへの気づき>
《同期と繋がることから見つけた連携の基礎》	<円滑な連携のためのフラットな日常会話> <他職種とつながるための環境づくりの重要性への気づき>

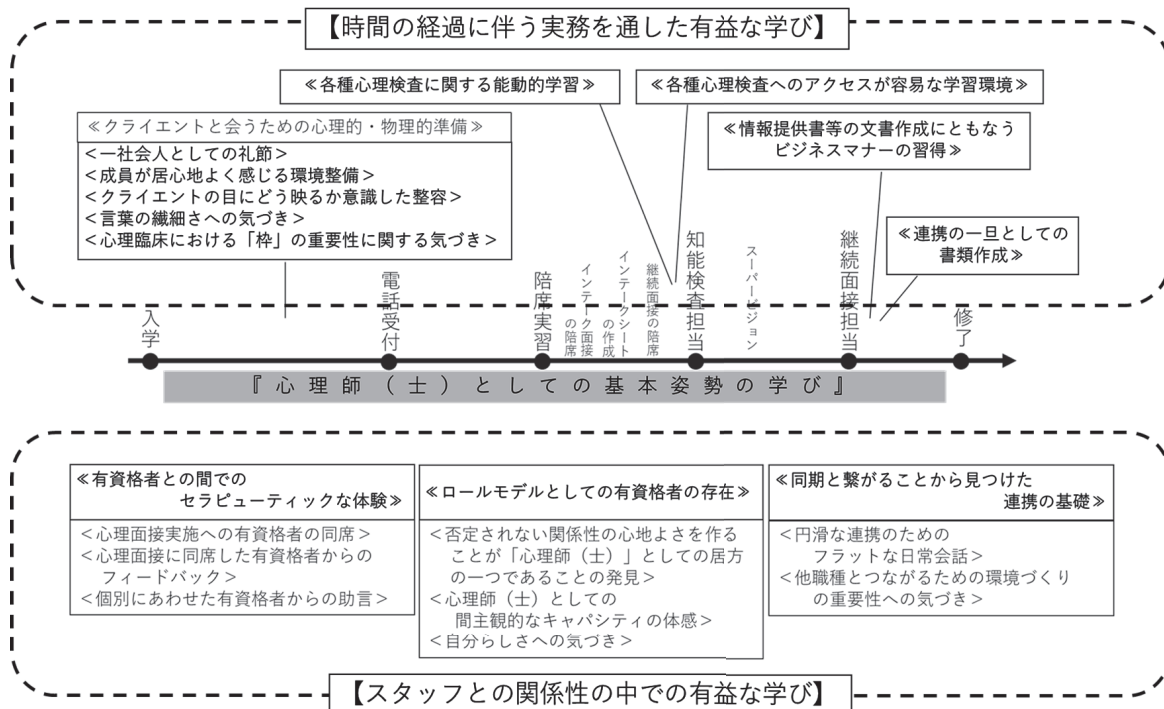


図2 現場での臨床活動に役立っている学内実習での体験

4. 学内実習で体験させてほしかったこと

質問7)は「在学時の学内実習において、こういう体験がしておきたかった(させてほしかった)、身につけておきたかったこと等ありますか?」であった。質問7)に対して得られた自由記述の回答のうち、「特になし」(2)、学内実習に直接関係の

ない「学外実習」との回答(1)の計3つを除外した。残った自由記述の回答をセグメント化したところ、15のテキストが得られ、14の「テーマ・構成概念」が形成された。形成された14の「テーマ・構成概念」を紡いで、ストーリー・ラインを記述した(表3)。

表3 学内実習で体験させてほしかったこと

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念
1	色んな検査にふれておきたかったです。現在の職場では様々な検査を実施するため、ウェクスラー知能検査以外の検査(田中ビネー、ロールシャッハ、パウムなど)もクライアントさんに実際に実施できていたらよかったですと思います。	様々な検査 クライアントさんに実際に実施	各種心理検査の 実施	各種心理検査の体験的学習	即戦力となるための 各種心理検査の実習体験
2	知能検査以外の検査をもう少し経験出来たらと思いました。	知能検査以外の検査	ウェクスラー系以外の 検査の経験	知能検査以外の心理検査、 心理検査の体験的学習	
3	ウェクスラー式知能検査以外の心理検査の実践実習・ローデータに触れる機会	心理検査の実践実習 ローデータに触れる機会	各種心理検査の 実践的学習	知能検査以外の心理検査の 体験的学習、 各種心理検査施行・見立て ・FBの一連について の体験的学習	知能検査以外の各種心理検査 の実習体験
4	知能検査の実施、見立ての提出やフィードバックがとても勉強になったことが多かったので、他の検査でもそのようなやりとりが先生やインテーク・ワーカーの方であれば、働くうえで基礎になるかなあと思いました。	知能検査の実施、 見立ての提出やフィードバック、 他の検査でも	ウェクスラー系以外の 検査の経験	各種心理検査施行・見立て ・FBの一連について の体験的学習	検査施行・見立て・FBまでの 一連の体験的学習
5	WISC-IV 現場で解釈を求められることが多いため	WISC-IV 現場で解釈を求められる	WISC-IVの解釈の仕方	知能検査(CHC理論系) の解釈方法	知能検査(CHC理論系) の解釈方法
6	現在の職場では、ほぼほぼ検査込みのアセスメントを行っているのでテストバッテリーの組み方についてもっと学びたかったです。実際に検査を取らなくてもこのケースの場合は、こういう検査を組み合わせるなどの意見が聞けると良かったです。	現場、検査込みのアセスメント、 テストバッテリーの組み方、 こういう検査を組み合わせる などの意見	心理検査の組合せ方	テストバッテリーの組み方 の実際についての講義	テストバッテリーの組み方
7	正直なところ、私自身は院生時代の初回面接がインテークシートを作るための面接になっていたのではないかと反省しています。	インテークシートを 作るための面接	資料作成のための面接	資料作成のための面接 に陥らない工夫	資料作成のための面接 に陥らない工夫
8	インテーク面接では、陪席をさせていただきましたが、講義などで「インテーク(初回)面接」についてしっかりと学ぶ機会があればよかったと思います。	「インテーク(初回)面接」、 初回面接にスポット を当てた講義	インテーク面接の要点 に関する講義	「インテーク面接」に関する 講義の実施	「インテーク面接」の要点
9	現場のケースでは初回面接における見立てがとても大事だと改めて感じます。センター実習や講義において「見立てをどう立てるか」という初回面接にスポットを当てた講義はあまりなかったように思います。	初回面接における 見立てがとても大事、 見立てをどう立てるか	初回面接での 「見立て」の立て方	インテーク面接での「見立て」	
10	初回面接において先生方がどんなことを聞き取り、どんなポイントを見て、アセスメントを組むか、陪席だけでなく、そのような講義などがあれば嬉しかったです。	初回面接、ポイント、 アセスメント、陪席だけでなく、 講義で取り上げていただける	インテーク面接での アセスメントのポイント についての講義	「見立て」の立て方 についての講義、 テストバッテリーの組み方 の実際についての講義	「見立て」の立て方
11	他職種への報告の仕方を学んでおくと現場に入るととても役立つと思いました。	他職種への報告の仕方	他職種への報告方法	他職種が求めている 情報の理解と それに応じた報告の仕方	他職種の特性理解、 各職種に応じた報告の仕方
12	リファーマンなどでの他機関へのつなぎ方・Dr.との連携の仕方。実習中にそういった機会があったが、インテーカー任せになってしまい、就職してからどのように連絡したら良いか、文章を作れば良いかなど困った。	他機関へのつなぎ方 Dr.との連携の仕方 インテーカー任せ、 就職して、困った	他機関との連携方法、 他機関Drとの連絡方法、 紹介状の書き方	主体的な学外者との連携、 文書作成における主体性	能動的な文書作成及び 他機関との連携
13	より専門的な教育分析	専門的な教育分析	より専門的なSV	専門的な療法・技法 についてのSV	各療法・技法に特化した スーパーヴィジョン
14	継続面接の陪席は、先輩だけでなくインテークワーカーさんの陪席をさせてもらったのがとても有意義でした。インテークだけでなく継続面接もインテークワーカーさんや有資格者の陪席に入ることがみんなができると思います。	継続面接の陪席、 インテークワーカーさんの陪席、 継続面接も、 有資格者の陪席	有資格者の 継続面接陪席	有資格者の継続面接の 陪席の有意性	有資格者の継続面接 の陪席実習
15	事前を知っていた方がよいと思われる各専門領域における基礎知識(医療領域であれば診療報酬や心理検査の所見を書く際のポイント、教育領域であれば各委員会や校務分掌など)やそこでの心理職としての動き方などについてもう少し詳しく知る機会があればいいなと思いました。	各専門領域における基礎知識、 診療報酬、所見、 ポイント、公務分掌、 そこでの心理職としての動き方	診療報酬の算定方法、 心理検査所見の要点、 学校臨床における 組織・役割体系、 各分野における基本事項の学習、 各分野での心理職としての 基本的な動き方	各臨床領域における 基礎知識の学習	各臨床領域における 基礎知識の学習

ストーリー・ライン

実習において体験させてほしかったことの一つは、即戦力となるための各種心理検査の実習体験であった。そこには、知能検査(CHC理論系)の解釈方法も含まれるが、特に知能検査以外の各種心理検査の実習体験が挙げられた。具体的には、検査施行・見立て・FBまでの一連の体験的学習、テストバッテリーの組み方が挙げられた。心理面接についても、資料作成のための面接陪席に陥らないための工夫や、「インテーク面接」の要点、「見立て」の立て方についての講義、有資格者の継続面接の陪席実習について体験させてほしかったと感じられていた。また、現場に出たら他職種の特性理解をベースとした各職種に応じた報告の仕方の重要性に気づかされ、そのために学内実習においては、能動的な文書作成及び他機関との連携に関する学びが必要と感じられていた。その他、各療法・技法に特化したスーパーヴィジョンや、各臨床領域における基礎知識の学習も体験させてほしかったこととして挙げられていた。

表3で得られたストーリー・ラインから、学内実習で体験させてほしかったことを、【心理的アセスメント】、【連携】、【自己研鑽】の3つのカテゴリに分類した。更に、【心理アセスメント】については「各種心理検査の実習」と「心理面接」の2つの下位カテゴリに分類されると捉えた。その他、【連携】には3つの下位カテゴリ、【自己研鑽】に2つの下位カテゴリに分類した(表4)。

5. 在学時にやっておけばよかったこと

質問8)は「在学時にやっておけばよかったと思うことはありますか?」であった。質問8)に対して得られた自由記述のうち、「特になし」(2)、学内実習に直接関係のない「医療実習」(1)、「学外研修会」(1)との回答であった計4つを除外した。残った自由記述の回答をセグメント化したところ、16のテキストが得られ、14の「テーマ・構成概念」が形成された。形成された14の「テーマ・構成概念」を紡いで、ストーリー・ラインを記述した(表5)。

表4 「学内実習で体験させてほしかったこと」のカテゴリ分類

【心理アセスメント】	
《各種心理検査の実習》	＜即戦力となるための各種心理検査の実習体験＞ ＜検査施行・見立て・フィードバックまでの一連の体験的学習＞ ＜知能検査以外の各種心理検査の実習体験＞ ＜知能検査(CHC理論)の解釈方法＞ ＜テストバッテリー＞
《心理面接》	＜インテーク面接の要点＞ ＜「見立て」の立て方＞ ＜有資格者の継続面接の陪席実習＞ ＜資料作成のための面接陪席に陥らないための工夫＞
【連携】	
《他職種の特性理解》	
《各職種に応じた報告の仕方》	
《能動的な文書作成及び他機関との連携》	
【自己研鑽】	
《各療法・技法に特化したスーパーヴィジョン》	
《各臨床領域における基礎知識の学習》	

表5で得られたストーリー・ラインから、在学時にやっておけばよかったと思うことを、【包括的な心理アセスメント】、【連携】、【知識の習得】の3つのカテゴリとそれぞれ4つずつの下位カテゴリに分類した(表6)。

表5 在学時にやっておけばよかったと思うこと

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念
1	様々な年齢の人の面接に入っておけばよかったと思います。働きだすと、関わる人や年齢が狭くなっていくこともあるので、子ども〜ご年配の方まで一通りの年齢の方と関わるチャンスがあるうちに面接に入れば良かったと後悔しています。	様々な年齢の人の面接、狭くなっていく、一通りの年齢の方	多様な年代のクライアントのケース担当	多様なクライアントと出会う機会	多様な年代の方のケース担当
2	ケースの見立てや進め方は経験を積んでできるようになっていくと思うので、沢山のケース担当・陪席をしておくこと	たくさんのケース担当・陪席をしておくこと	幅広く複数のケースに触れる機会	幅広く多くのケースに触れる体験	いろいろなケースとの出会い
3	エンカウンターなど集団を対象とする心理療法の実践にもっと積極的に参加すること	集団を対象とする心理療法の実践	集団心理療法の実践的学習	グループの見立てができること	グループアセスメントの実践実習
4	自殺企図など緊急性が高いケースを想定した実践的な実習	緊急性が高いケースを想定した実践的な実習	リスクアセスメントに関する実習	リスクアセスメントと緊急支援のロールプレイ実習	リスクアセスメントに関する実践実習
5	知能検査以外の検査実習(発達検査、投影法など)	知能検査以外、検査実習	各種心理検査の体験的学習	心理検査の体験的学習	
6	WAIS、WISC以外の心理検査をもっと実践的にしておけばよかった	WAIS、WISC以外の心理検査実践的に、しておけばよかった	各種心理検査の実践的な学習		
7	wisc以外の検査を勉強しておきたかったと思います。働き出したらなかなか質問ができる人もいないので。	WISC以外の検査	各種心理検査	心理検査の体験的学習、各種心理検査施行・見立て・FBの一連についての体験的学習	知能検査以外の各種心理検査の実習体験
8	色々な検査道具に触れたり、検査の練習をもっと積んでおけばよかったと感じた。	色々な検査道具、検査の練習をもっと積んで	心理検査の体験的・実践的学習		
9	在学時代は記録を逐語で書いていましたが動いてからはそうではないので、記録の書き方についてポイントや注意点など周りとやりとりしておきたかったと思いました。	記録の書き方、ポイント、注意点、周りとやりとり	要点を抑えた記録方法、それについてのやりとり	過不足のない記録方法の習得、記録することについての協議	過不足のない記録方法の習得および協議
10	オリエンテーションを意識して何かしらの専門分野を極める。	オリエンテーションを意識	臨床姿勢の軸としてのオリエンテーションの発見	臨床姿勢の軸足となる寄って立つ基礎の模索および発見	寄って立つ理論の模索・発見・習熟
11	心理に詳しくない他職種の中で仕事をしているため、大前提に「何ができるの?」と聞かれることが多い。浅く広く学ぶことも大事だと考えるが、どの理論も中途半場になってしまっていたため、時間や聞ける人が身近にあるうちに何かしらの興味・関心を深めておけばよかったと思う。	専門分野を極める、興味・関心を深めておけばよかった	特定の分野に関する習熟	自分に何ができるか言語化できるようになること	自分に何ができるか言語化できるスキル
12	医療現場で働く場合は、特に内科疾患についての知識も必要なので、ちょっとでも専門用語等勉強しておくこと、ミーティングや申し送りで見習いさんたちが何話しているのかわかりやすいと思いました。	内科疾患についての知識、専門用語等勉強	身体疾患に関する知識の習得、医学用語の学習	身体の構造や疾患に関する学習、医学用語・略語の学習	医療分野における専門用語・略語の学習
13	知識不足を痛感することが多い。	知識不足を痛感	未習熟さへの自責	知識の偏りの自覚	知識不足の自責

表5 在学時にやっておけばよかったと思うこと(つづき)

番号	テキスト	<1>テキスト中の 注目すべき語句	<2>テキスト中の 語句の言い換え	<3>左を説明するような テキスト外概念	<4>テーマ・構成概念
14	在学時代に疾患や薬に関する基礎知識を学んでおけばよかったと感じています。	疾患, 薬, 基礎知識 学んでおけばよかった	医療分野の 基礎知識の学習	身体の構造や疾患 に関する学習 医学用語・略語の学習	疾患別処方箋の 知識の習得
15	人を見立てることや、支援方法を考えるのに苦慮することが多く、見立てもすぐ浅くなりがちのため、カウンセリングやゆとりあ実習などにおけるアセスメントや支援に関して、より深く見立てる(印象に基づくアセスメントや支援を行うだけでなく、CIの状態像や環境なども踏まえ、専門的知識やデータに基づくアセスメントや支援を行う)練習を、意識して実践しておけばよかった。	アセスメント, 支援, より深く見立てる練習 専門知識やデータに基づく アセスメント, 支援を行う, 意識, 実践	アセスメントの要点, 心理アセスメントの修練	包括的に心理的アセスメント を行う力, 見立てを言語化する練習	包括的な心理アセスメント, 見立ての言語化
16	多職種への動き・考え方を学ぶ姿勢	他職種への動き・考え方を学ぶ姿勢	他職種について 知る機会	他職種との専門性の違い を知ること	他職種の専門性や通底する 信念について学ぶ姿勢

ストーリー・ライン

現場では包括的な心理アセスメントが求められる。そのために、多様な年代の方のケース担当を通していろいろなケースとの出会いをしておけばよかったと感じていた。また、グループアセスメントの実践実習、リスクアセスメントに関する実践実習をしておけばよかったと感じていた。その他、アセスメントとして、在学中に知能検査以外の各種心理検査の実習体験(知能検査に関する実習は既に現行の実習として含まれているため)をしておけばよかったと感じていた。

また、他職種との連携のためには自分に何が出来るか言語化できるスキルや見立ての言語化も必要であり、他職種の専門性や通底する信念について学ぶ姿勢が体験できていたとの思いがあった。加えて、過不足ない記録方法の習得および協議の必要性も挙げられた。

修了生は、現場に出てから知識不足の自責を感じ、医療分野における専門用語・略語の学習や疾患別処方箋の知識の習得をしておけばよかったと感じていた。また、寄って立つ理論の模索・発見・習熟の必要性も挙げられた。

表6 「在学時にやっておけばよかったと思うこと」のカテゴリ分類

【包括的な心理アセスメント】
《多様な年代の方のケース担当》 <いろいろなケースとの出会い>
《グループアセスメントの実践実習》
《リスクアセスメントに関する実践実習》
《知能検査以外の各種心理検査の実習体験》
【連携】
《自分に何が出来るか言語化できるスキル》
《見立ての言語化》
《他職種の専門性や通底する信念について学ぶ姿勢》
《過不足ない記録方法の習得及び協議》
【知識の習得】
《知識不足の自責》
《医療分野における専門用語・略語の学習》
《疾患別処方箋の知識の習得》
《寄って立つ理論の模索・発見・習熟》

IV 考察

本研究では、D2ルート該当の修了生及びEルート該当の修了生を対象に、在学時の学内実習が現在の公認心理師としての心理臨床活動にどの程度役立っているか調査することで、臨床心理士及び公認心理師養成における今後の学内実習のより良いあり方について予備的に検討することを目的とした。

1. これまでの学内実習の有益性について

1) 役立っていること

これまでの学内実習で提供されていたほとんどの項目は、現在の心理臨床活動に役立っていると回答されていた。【時間経過に伴う実務を通じた有益な学び】では、<心理臨床における「枠」の重要性の

気づき>や<一社会人としての礼節>等の《クライアントと会うための心理的・物理的準備》のような心理師(「士」を含む)にとって必要な素養を体験的に学べていたと考えられる。また、【スタッフとの関係性の中での有益な学び】では、《ロールモデルとしての有資格者の存在》から、<否定されない関係性の心地よさを作ることが「心理師(士)」としての居方のひとつであることの発見>や、《同期と繋がることから見つけた連携の基礎》から、<他職種と繋がるための環境づくりの重要性への気づき>等が得られていたことが示された。これまで、臨床心理士養成の実習の場として機能してきた学内実習において、こうした『心理師としての基本姿勢の学び』が得られたのは当然であり、重要なことである。

2) あまり役に立っていないこと

「あまり役に立っていない」と回答された項目は、「電話受付実習」、「臨床心理センター業務等マニュアル」、「各係の仕事」、「インテーク面接の担当」、「個別のスーパーヴィジョン」の5つであった。前者3つは、学内実習に馴染んでいくための手段として機能している部分大きい。後者2つは、在学中に担当したケースと現在の臨床現場で出会うクライアント層が合致しないことが「あまり役に立っていない」と感じられる要因だったのではないだろうか。

2. これからの学内実習のあり方について

以上を踏まえて、これからの学内実習のあり方について考察する。表4,6より、学内実習で「体験させてほしいこと」「やっておけばよかったと思うこと」の両者に共通していたのは【心理アセスメ

ント】と【連携】に関することであった。公認心理師養成においては、「どのように専門性を発揮し、多職種と連携しながら役割を果たしていくか」（松井，2021）に重きが置かれ、「多職種協働」や「コンサルテーション」ができる心理師としてのコンピテンシーが求められている（岩壁，2018）。修了生は臨床現場に出て、それを肌で感じ取り、【心理アセスメント】や【連携】の難しさと共に重要性を感じていた。

これらのことから、これからの学内実習においては、1) 他職種との連携を意識した風土の醸成、2) 包括的な心理アセスメントの実務実習、3) 各種心理検査の実務実習のあり方について検討が必要と考えられる。これらの事項を今までの学内実習のあり方に付加していくことは、臨床現場に出た「初期に生じるリアリティショック」（岡本，2007）を少なくする方法になり得る。

1) 他職種との連携を意識した風土の醸成

現場に出ると、《他職種の特性理解》に基づく《各職種に応じた報告の仕方》が求められる。そのため、学内実習においては、その下準備として、実習生自身が《能動的な文書作成及び他機関との連携》に従事する機会を準備する必要がある。そうすることで、連携に必要な《見立ての言語化》が促される。また、作成した文書に対しての有資格者等の他スタッフとのやりとりを通して、専門性の理解を深めるきっかけにもなり、《自分に何ができるか言語化するスキル》が身に着けやすく、他職種との連携を意識した風土の醸成が可能になっていくと考えられる。

心理師養成においては、「心理専門職としての伝える能力」（野末，2018）や「自分で感じ考えることをサポートすること」（割澤，2016）の必要性が指摘されている。これは、他職種との連携のために必要な力であり、上記のとおり、《能動的な文書作成及び他機関との連携》に従事することにより、体得されやすくなると考えられる。

2) 包括的な心理アセスメントの実務実習

他職種と連携していくためには、まず心理師の専門性に基づく《自分に何ができるか言語化できるスキル》とそれを根拠づけるための【包括的な心理アセスメント】の能力が必要である。【包括的な心理アセスメント】には、リスクアセスメントやグループアセスメントも含まれる。

自傷他害の恐れがどの程度あるかというリスクア

セスメントとその対応については、これまでの学内実習では、インテーク面接の陪席実習を通して体験されていた。リスクアセスメントの要点を体得するためには、陪席実習のみならず、実務実習を通じた学びが有用と考えられる。リスクアセスメントの力をどのように身に付けていくかは、今後の検討が必要である。

《グループアセスメントの実践実習》については、臨床現場ではデイケアや放課後等デイサービスのグループ活動等で従事することが多い。これについてもどのように学内実習の中で提供しうるか、今後検討が必要である。

3) 各種心理検査の実務実習

これについては、表3、表5で最も多く回答されていた。依田（2015）は、大学院生が訓練不足と感じていることとして「テストバッテリー」「実践経験」、要望として「臨床現場で多用される検査を扱うこと」「結果の伝え方までをセットにすること」等を挙げていた。永野（2007）も、心理検査について「より使える形での知識・経験」の必要性や、それぞれの検査に慣れ親しみ、解釈や所見の書き方などを習熟できる機会の要望等を挙げていた。本調査結果でも得られたく即戦力となるための各種心理検査の実習体験や「検査施行・見立て・フィードバックまでの一連の体験的学習」と一致する。

以上のことから、臨床現場では、知能検査の実施に限らず各種心理検査が実務として求められていると考えられる。実質的には現場に出てから心理検査の施行・所見作成・フィードバックの実際を体得していくことがほとんどであり、これがリアリティショックの一因ともなっている。

そのため、学内実習においては《各種心理検査へのアクセスが容易な学習環境》を保障しながら、まず、どのような検査をどのような形で実践実習として導入していくか、丁寧な検討が必要になっていくであろう。

3. まとめ

本研究の結果、これからの学内実習のあり方については、これまでの臨床心理士養成で培われてきた『心理師としての基本姿勢の学び』を土台としながらも、「他職種との連携を意識した風土の醸成」、「包括的な心理アセスメントの実務実習」、「各種心理検査の実務実習」の必要性が示された。いずれもどのような形で実習を提供し得るか、関係者間で協議をしながら検討していく必要がある。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆様、貴重なご意見を多数お寄せ下さり、ありがとうございます。心より感謝申し上げます。

文献

- 海老名悠稀 (2008). 指定大学院 (一種) 修了生が役立った内部実習: インタビュー調査から見えた1期生と2期生の評価の違いから. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **10**, 13-25.
- 福土元春・名郷直樹 (2011). 指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない—指導医講習会における指導医のニーズ調査から—. 医学教育, **42** (2), 65-73.
- 岩壁 茂 (2018). I 公認心理師の職責 6. 自己課題発見・解決能力. 2018年版公認心理師現認者講習会テキスト. 一般財団法人日本心理研修センター. 金剛出版. pp33-43.
- 金沢吉展 (2014). 医療領域における心理職に求められる知識・スキル・態度に関する研究. 心理学紀要 (明治学院大学), **24**, 21-35.
- 厚生労働省 (2017). 公認心理師のカリキュラム等について. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihoke-nfukushibu/0000174192.pdf> (2022年2月4日取得)
- 厚生労働省 (2022). 今後の公認心理師試験のスケジュール (予定). <https://www.mhlw.go.jp/content/001004939.pdf> (2022年11月10日取得)
- 松井幸太 (2021). 臨床心理士および公認心理師養成における実習の現状と課題. 関西国際大学心理臨床研究, **4**, 1-9.
- 永野浩二 (2007). 修了生のアンケートから見える大学院教育. 追手門学院大学心のクリニック紀要, **2**, 95-107.
- 野末武義 (2018). 公認心理師の養成をめぐる課題—臨床心理士との比較から—. 明治学院大学心理学部附属研究所年報, **11**, 43-48.
- 老松克博 (2019). 公認心理師の養成プログラム (大学院) の概要. 臨床精神医学, **48** (5), 599-603.
- 岡本かおり (2007). 心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について. 心理臨床学研究, **25** (5), 516-527.
- 奥村茉莉子 (2019). 臨床心理士と公認心理師. 臨床精神医学, **48** (5), 587-592.
- 大谷 尚 (2008). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達化学研究科紀要 (教育科学), **54** (2), 27-44.
- 大谷 尚 (2019). 質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで—. 名古屋大学出版社.
- 高橋陽子 (2008). 「学内実習の場」としての別府大学臨床心理相談室の役割—大学院修了生へのアンケート結果より—. 別府大学臨床心理研究, **4**, 2-13.
- 割澤靖子 (2016). 臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究. 教育心理学研究, **64** (1), 41-58.
- 依田尚也 (2015). 臨床心理士養成大学院における大学院生の心理検査訓練体験について. 人文, **14**, 169-177.